

①授業の展開

タイムスケジュール

- 全ての授業が100分授業。
- 毎回の流れは以下の通り。
 - 1、授業プリントの配布
 - 2、授業の「目的」を中心としたアウトラインの説明（5分～30分）
 - 3、課題に取り組む時間
 - 4、「学び合い」タイム開始（生徒の様子を見て、ある程度課題を見通せている段階で）
 - 5、授業レポートの作成（5～10分）

プリントの構成

「タイトル～サブタイトル」 単元名と重要ポイント

「目的」 今日の授業で全員に達成してほしいと思っていること

「課題」 授業の目的を達成するために手段。多くの生徒は課題を順番にこなす。

「発展課題」 単元の内容に関係した発展的な課題。知識の点をつなげることが目的。

「参考資料」 教科書の内容を補う内容。あくまでも補助的に使用。

導入の語り

- （授業レポートを用いた前回の学習内容へのコメント）
 - 「目的」の確認、各「目的」と「課題」とのリンクの確認
- ※山登りの例え。頂上に着けばよい。ルートは様々。どれで登ってもよい。
- 教科書、プリントのみでわかりにくいと想定される点について講義

課題に取り組む時間

- 最終的に「目的」が達成されるように取り組む。
- 教科書が中心だが、必要に応じて資料集などその他の資料も利用可能（教員が準備）。
- 携帯・スマホ等での検索も可能。
- 自由に席を移動して相談しながら行うことも可能。

※実際には、自分の席で教科書と配布資料のみで進める生徒が大半。

- 教員は机間巡視をしながら進行度等をおおまかに確認。必要に応じて声かけ。安心感につなげるとともに、教室内の「沈黙」を破る意味合いも。

「学び合い」タイム

- 「はいどうぞ」だけでは動き出せない生徒がいる（本当は情報交換したいけれど一歩が踏み出せない）。

- 学びの反応を「触媒」するためのしかけとして「トランプによるグループ分け」
 - 「学び合い」を強制しない。まずは「自分が安心して学べること」。年度当初の教員の動きは「不安を解消すること」
- ※ただし、「なんでもかんでも生徒の要望に教員が応える」ということではない。大抵のことは「生徒相互でのインタラクション」で解決できる。目先の問題解決ではなく、大きな目的を意識する。
- 「自分なりの課題の消化（消化不良な部分の洗い出し）」ができてからでないと動きたくない場合が多い。タイミングも重要。

授業レポートの作成

- 授業の振り返りは、教員ではなく、自分で行う。
- 「目的」と「課題」の達成度を別々に自己評価。
→「目的」や「課題」を見直すことで振り返りになる。
- 「授業で最も大事だと思ったこと」を理由とともに記述する。
→理由を書くことで振り返りになる。

指導と評価の一致に関して

- 目的の語尾は「知る」「わかる」「できる」。
- これらが達成されていさえすれば解ける試験問題にする必要がある。
※普段授業で語っている価値や方法とズレた試験を実施してしまうと、生徒の内発的動機付けを低下させることになる。
- 最低限の暗記を求めるときは、「覚える」という語尾の目的も加えておく必要あり。

②実践のヒント（授業実践の「失敗」を材料に）

「あらかじめ内容がわかっている生徒」を前提としない

以前の考え方「学ぶ内容はすべて生徒にまかせればよい（生徒は有能だから）」

現在の考え方「現状を見極め、適切な支援を図る」

- 小学校では、塾・予備校で内容を先行して学び、ほぼ頭に入っている子どもの存在を想定できる。また、40分～50分で学ぶ内容を5～10分で理解できる子どももいるかもしれない。
 - 高校では、内容が高度化していることもあり、このような生徒はなかなか想定できない。
→初学者に対しての「道筋」を示すことも必要（短い講義、板書、配布資料 e t c . . . ）
ただし、このような「補助」自体をどう活用するかを選択権は生徒に委ねる（必ずしも講義を聞く必要はない e t c . . . ）
- ※『学び合い』を、「生徒を信じて全てを任せる」と理解し、何の前置きもなく「はいどうぞ」では4月当初は難しい場合が多い。

達成度は人それぞれ違っている

以前の考え方「時間内に全員が達成できることが重要」

現在の考え方「達成度はそれぞれ違っているが、ある時間スケールで最終的に同じベクトルで向か

っていることが重要」

- 「全員達成＝全員が同じハードルをクリア」でなくてもよい。
- 内容が10あったとして、ある生徒は半分の時間で10全て達成し、ある生徒は最終的に5までしかいかなかった。しかし、その生徒が自分のゴールに向かって最善を尽くし、周囲もそれに対して最善を尽くしたのなら、それでよい。だから、授業で大切にポイントを「全員が時間内に達成」から「目的を持ち、その達成に向かって最善を尽くす」に変更。
- 前提として大切なのが、「目的」と「課題」の明確化。あくまでも「目的」の達成を目指す（だから、課題が全てできなくてもよいし、課題だけにこだわらなくてもよい）。

「課題に取り組む時間」は様々な意味でのセーフティーネット

セーフティーネット①様々な言語能力を活用可能

- 言語能力の4つの側面「読む」「聞く」（インプット型）「書く」「話す」（アウトプット型）の得意・不得意は、それぞれの生徒によって異なる。
- 従来の一斉授業の講義型であれば、「聞く」力と「書く」力（特にメモをとる能力）に特化してしまい、そこが苦手な生徒にとって最適化されていない可能性がある。
- 自由に取り組めるということは、それぞれの生徒の得意なことを中心に学習できるということ。
 - 「読む」能力の活用＝教科書、各種資料からの情報収集
 - 「聞く」能力の活用＝ゲートキーパーを探し、聞くことで情報収集
 - 「書く」能力の活用＝適切なメモの作成、読んだこと、聞いたことをまとめ理解を深める
 - 「話す」能力の活用＝質問をして理解を深める、説明をして理解を深める

セーフティーネット②いつ、どこからでもやり直し可能

- 欠席してしまった、集中力を欠いた、真剣に取り組んだがついていけなかった、様々な理由で「ドロップアウト」してしまう生徒を、一斉授業では置いていくことになる。
- 「自由に使える時間」があることで、いつ、どこからでもやり直し可能に。

セーフティーネット③それぞれの楽しさで内発的に学べる

- 説明するのが楽しい、良い説明をしてくれる人から教えてもらうのが楽しい、教科書や資料を読み進めていくのが楽しい、スマホで検索しながら新しい知に触れるのが楽しい、答えを知る前にとことんまで考え抜けることが楽しいe t c...
- それぞれの楽しさで学べるので、内発的な学びが促進される。
- 最終的には「わかる楽しさ」「学ぶ楽しさ」を感じて欲しい。

→「学ぶ方法」「学びの順番」「それぞれの学びにかかる時間」が自由であることで、それぞれがそれぞれの時間を最適化することが可能。

早く終わっている生徒に「全員達成」を強要しない

以前の考え方「人に説明することは自分にとっても得。それがひいては全員達成につながる」

現在の考え方「全員達成や説明することの価値を語る。選ぶのは生徒自身」

- 大切にしたいのは内発的動機付け。
- 全員達成とそれに向けた動きの強要＝ Make them do
- 価値を語り、その価値に納得・共感し動き出す＝ Let them do

※「仲良くなる」ことで「自分事化する」ということも意味がある（『学び合い』の学校観）

コミュニケーションが苦手な生徒への対応

以前の考え方「あえて積極的な支援を行わない。見守る姿勢。知識のない愛に力はない」

現在の考え方「まずは安心感を与えることから。その前提からその先の価値を伝えていく」

- まずは、「You are OK」というメッセージを伝え、実感してもらえらること。
- 自己肯定感を育むことが、「学び合い」を促進する前提。
- 「一人も見捨てない」ための活動ができなくても、「私は見捨てられていない」を全員が感じられる状況をつくる方が先。何よりもまず「安心して学べる場」であることが求められる。

発展課題を評価に入れない

以前の考え方「適切な評価がやる気を引き出し、さらなるやる気を生む正のスパイラル」

現在の考え方「報酬も罰も外発的動機付け。それらは内発的動機付けを低下させる危険性」

- 最初は興味でやっていたかもしれないが、「評価されること」が目的化してしまうと、学びそのものにある価値が薄れてしまう。つまり、評価がなくなればやらなくなってしまふ。もしくは、最初から興味もないのに点数狙いで取り組む生徒も出てくる。
- 発展課題の目的は、「学びを広げ、深めることにより、知識の点をつなげる」ことにあるので、内発的動機付けに基づいてやってもらう方がよい。

「理屈」と「経験」の両輪が内発的動機付けを高める

以前の考え方「『学び合い』の価値を語ることで多くの生徒に伝わる。語りが大事」

現在の考え方「理屈も大事。しかし経験も大事。いずれにせよ目指すのは納得と共感」

- 『学び合い』の考え方は理路整然としている。しかし、大事なことは「納得」や「共感」をしてもらうこと。

多くは、

理解→納得→共感

のプロセスをたどる（例外もある）。個人的な解釈では以下のようなイメージ。

理解：こちらの伝えたいことの意味がわかる（価値判断を含まない中立な段階）

納得：理解した内容が腑に落ちる（内容に対する肯定的評価、「確かにそうだ」の段階）

共感：考え方、心のレベルでの同調。

- 理解してもらうためには、丁寧でわかりやすい説明が必要。
- 納得してもらうためには、そのことによってその人自身が得られるであろうメリットを認識してもらうことが必要。
- 共感を得るためには、「熱意のある語り」だけではなく、「確かにこれはいいと思える経験」も重要。「完成された理屈」をそのまま語ったからといって生徒は納得、共感するとは限らない。
- 経験は、理屈を超えて「共感」に至ることもある。

③その他の話題

内発的動機付けを高めるには

- 有能感＝できる喜び
- 自己決定感＝自分で選べる喜び
- 他者との関係性＝他者とつながる喜び

多様性と「つながり力」

- 多様性の価値への気付き
多様性への気付き→多様性の受容→多様性の活用
- “I'm OK, and you are OK”の心の構え
自分も多様性の一つ。だから、自分が大切に思える。
あなたも多様性の一つ。だから、あなたも大切に思える。
- 「つながること」の価値への気付き
ある課題に対しての「能力」「時間」「立場」など様々な背景での問題を一気に解決できる可能性
- 「つながり力」の育成
「自立＝依存」という心の構え
「助けて下さい」と言える能力+助けてもらえるような「関係性のマネジメント」

「木を見て森を見ず」から「木を見て森を考える」へ

- 授業を構成する要素
「目的」＝森（全体を引きで見た様子、ざっくりとこんな感じ）
「課題」＝木（クローズアップの視点、細部を見る視点）
- よくある課題
「木を見て森を見ず」＝一つ一つの課題は理解できたけれど、全体像（目的）があやふや
森を意識せずに木の一本一本ばかりに意識がとられてしまう。
視点の切り替えの意識が必要。
- 展開例
 - ①木を見て森を考える
「木＝課題」のみを与えて、その後「森＝目的」を生徒に考えさせる。
 - ②森を入り口に木を調べに行く
「森＝目的」のみを与えて、その後「木＝個別の知識・理解」を調べさせる。
 - ③木を調べつつ森を考える
「木＝課題」も「森＝目的」も与えず、教科書の内容の理解を求める。

「木を見て森を見ず」→「木も森もしっかり見る」→「木を見て森を考える」
のような展開は可能。

創造性の育成と「突き抜けた人材」育成

- 創造性＝関連付け（点と点をつなぐ営み）
 - どうすれば創造性が培われるか？あるいは伸ばせるか？どうすれば「突き抜けた人材」を育てることができるか？
- 今後の課題（『学び合い』の考え方の中でどのような具体的な実践が可能か思考中）

『学び合い』の考え方の応用

- 高校の様々なアクティビティー（授業、部活動、行事、委員会 e t c...）は、基本的に生徒主体でやらせる。
- 放任、放置とは違う。「語り」が重要。価値を語り、共感を目指す。強要はしない。生徒に選ばせる。
- 教員の仕事は「新たな世界の提示」と「適切な場の設定」。
- 「大学受験指導」「キャリア教育」も同じ視点で実施可能。
- 「静かに学ぶ自習室」＋「学び合える自習室」

情報発信のご紹介

①個人のHP

個人のHPで、授業プリントやブログを公開し、情報発信しています。
今日紹介しきれなかった部分も、今後『学び合い』のコンテンツとして整理し公開する予定です。
お時間のある時に是非ご覧ください。

生物「を」教える視点 生物「で」教える視点

<http://biologymanabiai.jimdo.com/>

②Facebook

Facebook で情報発信をしています。

<https://www.facebook.com/tomohisa.ohno.79>

「ペンギンのイラスト」の大野智久です。